

日本の大学生・その勉学と就職の状況

— 大学大衆化の中で、多様化する価値観と行動様式 —

大 石 脩 而

Attitudes of Japanese Students towards Study and Careers

Shuji OISHI

I. はじめに

日本の大学（短大を含む）の進学率は、同一年齢層のほぼ50%にのぼり、先進諸国の中でもアメリカに次ぐ高進学国である。（資料1, 4）

大学受験前の高校（15～17歳）には国民の95%以上が進学し、さらにその半数が大学（18～21歳）・短大（18～19歳）に進学する。このように義務教育の中学校を終えた15歳以上の青年の大多数が、実社会で苦勞することもなく、高校、大学という「疑似社会」の中で青年時代を過ごすような社会を、大げさに言えば、歴史上経験した国はなかった。

それに伴って、大学は、一握りのエリートを対象にしたヨーロッパ型の大学から、大衆（マス）を呑み込んだアメリカ型の高等教育機関に変質した。その特徴は「多様化」である。「大学生」という一つの概念で、彼らを語ることは不可能である。

（註）アメリカの高等教育研究者マーチン・トロウ教授は、高等教育の発展を3段階に分け、進学率15%以下を「エリート型」、50%までを「マス型」、それ以上を「ユニバーサル型」とし、それぞれの段階ごとに高等教育は変質していくとしている。日本の大学は「マス型」から「ユニバーサル型」への移行期にある。

一方、大学を取り巻く社会環境も、日本経済の高度化に伴って大きく変わった。当然のことながら、「大学生」と言う名の青年の人生観（価値観）や行動様式も、親たちの時代とはかなり違ったものになっている。

彼らの「勉学や就職の状況」を、こうした日本の大学生の置かれた現実の社会状況から切り離して説明することは無意味であろう。勉学態度や就職観のようなものは、現代日本の社会状況の中で生きる青年たちの、人生観の表現の一つに過ぎないからである。

そこでまず、日本の大学生の意識や行動様式のアウト・ルック（概要）をうかがい知ることができる一つの調査を取り上げ、それを手がかりに本論を進めることにしたい。

II. 「日本の大学生の意識と生活」 (リクルート調査、資料2)

(註) リクルート社は、学生には実業界(会社)の社員採用情報を、実業界には社員採用に必要な学生情報を供給している大手の調査会社で、この調査は、日本の大都市圏(首都圏、関西)にある大学生1,000人を対象にしたものである。(1997年)。

調査内容の要点は、以下のようである。(括弧内コメントは筆者)

- 1) 学生の約60%は今、熱中していることがある。
- 2) また、約70%は、今の状態を「充実している」と考えている。
(ただし、何ををもって「充実」というのか、という充実の中身は多様化しており、この数字が直ちに「勉学の充実」を意味するものではない)
- 3) 一方で「今、悩みがある」という学生が65%にのぼる。
(どんな時代の青年にも「悩み」はつきもので、だからといって彼らが不幸であるわけではない)
- 4) 大学進学目的は、「それ以外は考えなかった」(約40%)、「もっと勉強したかった」(同)、「まだ社会に出たくない」(同)、「みんなが行くから」(約20%)などである。
(大学大衆化が進むにつれて、「もっと勉強したい」以外の進学目的が多くなった。特に「まだ社会に出たくない」というモラトリアム＝決定猶予が、青年の自立を遅らせ、彼らは「人生最後の自由時間」である学生時代をエンジョイしている)
- 5) 学部・学科を選択した理由は、「学びたい学問だったから」(約75%)、「高校時代の得意科目だから」(約25%)、「就職に有利だから」(約20%)などが多い。
(このうち「就職に有利だから」という選択が、入学後のミスマッチを生み、勉学意欲の減退や転部・転科の原因になっている)
- 6) その授業を選択した理由の80%は、「内容に興味がある」という当然の理由だが、かなりの学生が「勉強しなくても単位が取れる」という安易な理由だけで授業を選択している。
- 7) 履修コマ数(1週間、13.4コマ)はまずまずだが、平均出席率(7.7%)が極めて悪い。
(平均的な大学の1週間に履修可能なコマ数は20コマである)
- 8) 学生が「将来役に立つ」と思う授業は、全体の2/3程度である。
(そんな授業状況を改善するため、全体の80%の大学が「学生による授業評価」などの自己点検・評価を実施している。資料3)
- 9) 学生は1ヶ月平均3.5冊の本と、4.8冊の雑誌を読んでいる。
- 10) いずれにせよ、約60%の学生が、程度の差はあれ大学に満足している。
(ただし、必ずしも「授業内容に満足」していることを意味しない)

- 11) 何らかのアルバイトをしている学生は約75%にのぼり、その1/3はアルバイトなしには学業を継続できない。
- 12) しかし、大部分の学生は自分の趣味を満足するためにアルバイトをしている。
- 13) 学生の持ち物を見ると、自動車を15%が持っているなどかなり裕福である。
- 14) 約半数の学生がサークルやクラブに加入し活動している。
(大学は「青年の社会」で、友人を得たり、青春を燃焼する場が必要である)
- 15) 学生の約80%が「自分はまだ生活能力がなく」「現実問題の判断力がない」、つまり「大人ではない」と思っている。
(こうしたモラトリアム型の青年の増加は、先進社会共通の問題である)
- 16) 「親を尊敬している」学生が約75%いる反面、「親に言えない秘密がある」学生も約75%いる。
- 17) 以上のような学生生活の中で、就職の準備に精を出している学生が約70%おり、約20%が語学系、ビジネス系などのダブルスクールに通っている。

これが、日本の学生のアウトルックである。

彼らの親や祖父母たちの時代の大学生は、もっとハングリーであった。大部分の学生は、貧しい生活からの脱出を求めて、あるいは親兄弟を安心させるために、余計なことを考えたり、したりする余裕はなかった。その子どもたちである彼らのアウトルックは、良くも悪くも彼らが「豊かな社会が生んだ鬼っ子」であることを物語っている。

Ⅲ. 拡大する大学間格差（階層化）と学生の人生に対する自覚

1. 大学間格差（大学の階層化）

日本の大学生を見る時、もう一つの欠かせない視点は、大学の大衆化によって大学間格差（階層化）が拡大していることである。

大学が大衆化し、同一年齢層の半数が大学に進学するということは、進学者の中に、高い学習能力を持った一群と、必ずしもそうでない大衆的な学生群が混在していることを意味する。

学習能力が高い学生は、伝統があり、優れた教員と教育環境を持つAレベルの大学に集中し、入学試験も難しい。その次の学生は自分の学力に見合ったBレベルの大学に、以下順次Cレベル、Dレベル、Eレベルの大学に進学することになって、入試の難易度による大学のヒエラルヒー（階層）ができあがっている。

具体的な調査に基づいた分類ではないが、これら各レベルの大学の中で、Aレベル大学だけが、前述の進学率15%以下だった時代のエリート型大学に相当する力をようやく維持しているのが現状であろう。残るB、C、D、Eレベル大学は、いわば大衆化したマス型大学である。

その結果、同じ授業科目でも、大学のレベルに応じてその内容や水準が違ってくる。学生の興味関心や人生観も違う。自ずから勉学や就職に対する考え方や態度も違ってくるのは当然の成り行きである。

例えば、Aレベル大学の学生は比較的によく勉強するし、就職も有利である、といわれる。ただそうは言っても、Aレベル大学にも大衆的学生がいるし、Bレベル以下の大学にも少数ながらエリートの学生がいるのも、また事実である。

2. 学生の人生に対する自覚（アイデンティティの確立）

学生の勉学態度や就職観を左右するもう一つのキーワードは、精神病理学者E・F・エリクソンの言う「アイデンティティの確立」であろう。「人生に対する自覚」と言ってもいい。

彼は、「青年には、大人になる課程で果たさなければならない重要な課題がある」という。それは「青年には、自分の家族や身近な共同体（親戚、学校、地域社会など）から、こうなって欲しいと望まれている役割があり、その望ましいと思われる役割を、自分の果たすべき役割として受け入れることができるかどうか」、言い換えれば「自分に期待された役割に自己を同一化（アイデンティファイ）できるかどうか」という課題で、その自覚次第で青年の生き方は変わってくる、というのである。

こうしたアイデンティティを確立できた学生は、日常の勉学に自分なりの意義を感じ、よく勉強し、就職活動にも真剣になるが、その自覚に至らない学生は、今何をやればいいのかかわからない中途半端なモラトリアム（決定猶予）と状態から抜け出せない。

しかも厄介なことに、日本のような急激に変化する高度複雑社会では、将来どういう社会が到来するのか、時代の先を読むのが非常に難しくなっている。このことは、青年が自らの役割や課題を発見し、それに対するアイデンティティを確立しにくい社会状況が進行していることを意味している。

IV. 日本における大学（生）観と学生の勉学態度

1. 「人間性善説」に立った日本の大学

また、日本の大学は、よく「入学するのは難しく、卒業するのは易しい（つまり、勉強しなくても卒業できる）」と言われる。反対に、アメリカの大学は「入学するのは易しいが、卒業するがの難しい」という。

日本の大学がこう言われるのは、大学というシステムが「人間性善説」に立って運営されているからである。学生は言われなくても自主的に勉強するものだ、あるいは、教員は黙っていても熱心に研究や学生の教育に取り組むものだ、という人間性善説を前提にして大学が組織されている。

したがって、普段の授業で学生に課題を与え、勉学を強制するようなことは滅多になく、学生たちは予習も復習もしないのが普通である。教員も、社会や大学から日常の教育業績を問われない。

反対に、アメリカの大学は人間性悪説を組織原理にしている。学生は放って置けば怠けるものだ、という考えから、学生には多くの課題を与えて勉強させる。教員にも常に論文を書かせ、厳しくその評価が行われている。

確にかつてのヨーロッパの古い大学は、人間性善説を組織原理にしていたが、それは大学が一握りのエリートを相手にしていた時代の話である。

大学が大衆化段階に入った日本の大学が、なぜ何時までもエリート型大学時代の人間性善説を変えないのか、という理由の一つは、日本の社会全体が大学教育自体を高く評価していないからではないか、と思われる。事実、会社が新卒社員を採用する時なども、大学で何を勉強したのかとか、成績はどうだったのかとか、をほとんど問題にしない。

こうしたことから、日本の大学生は、世界の大学生の中で最も勉強しない学生の部類に属する、と言えるだろう。

2. 大学受験勉強からの開放感

日本の大学生の勉学態度に大きな影響を与えているものに、もう一つ、小学生時代から長く続く大学受験勉強がある。

日本の社会は、学歴が実力よりも尊重される「学歴社会」と呼ばれてきた。これは、日本が明治以来、主として学校教育を通じて近代国家建設の担い手を育成したためで、事実、たとえ家が貧しくとも上級学校さえ出れば立身出世が可能だったからである。その頂点に東京大学などの一握りのエリート型大学があった。

大学が大衆化した今日、そんな学歴社会は崩れつつあるが、それでもなお日本社会には学歴信仰がいまだに根強く残っており、子どもたちの多くが小学校の頃から受験勉強のための塾へ通っている。

Aレベルの大学に合格するにはAレベルの高校に進学するのが有利であり、Aレベルの高校へ進学するにはAレベルの中学に行くのが早道である、と考えられることから、中学から大学に至るまでの入学難易度による学校のヒエラルヒーができあがっている。

その結果、小学生の1/3近く、中学生になると2/3近くが、よりレベルの高い上級学校

を目指して受験塾へ通うことになった。

こうして目指す大学に合格した大学生も、あるいは目指す大学には合格できず、第二、第三志望の大学に入学した学生も、入学試験が終わると、これで受験時代が終わったか、と肩の荷を下ろした心理状態になる。

つまり、彼らにとって大学は、受験勉強から開放され、やっと自由になれるゴールである。しかも、大学は前述のように人間性善説に基づいて組織運営されており、課題を毎日与えられることもない。多くの大学の図書館はガラガラで、学生の授業時間中の私語と居眠りが問題となっている。

そんな彼らが、やっとその気になって勉強し出すのは、卒業の間近になってからである。

その勉強ぶりを、日本の代表的な東京大学の学生に聞いてみるとおよそ3つのタイプがあるという。

(タイプ1) よく勉強するのは公務員試験、外交官試験、司法試験、公認会計士試験などの国家試験を受験しようとする学生たちである。授業の成績も「優」を揃えようとする。ジャーナリストのような専門職になろうという学生や、理工学部のように実験実習が多い学生も、比較的よく勉強する方である。こういう学生は全体の15%程度だという。

(タイプ2) 自分から進んで勉強するわけではないが、授業中に課題が与えられたり、学期末試験が迫ったりした時には、それなりの勉強をして単位を取る。授業の成績などにはあまりこだわらない。このタイプが大多数である。

(タイプ3) 大学の授業を無意味だと思っている。したがって勉強などはしないで、もっと他の自分の興味のあることに時間を使っている。

これが他の大学になると、大衆化した大学ほどタイプ2、タイプ3が増える。Cレベル以下の大学にはタイプ1の学生はいなくなる。

それにもかかわらず、前述の学生調査で、約60%の学生が熱中するものを持っており、約70%の学生が充実した生活をしている、と答えているのは、勉学以外の、例えばスポーツとか、音楽とか、趣味やアルバイトとか、の中に青春の生き甲斐を見出しているからである。

V. 大学生の就職状況と就職観

1. 新卒者就職率(資料4)

大学新卒者の就職状況は、当然のことながらその時期の産業・経済界の好況、不況の影響を受ける。文部省調査(資料1, 4)をみても、バブル経済崩壊後の平成不況によって、就職率(平成4年～)は約80から約70%に落ちている。

それまでの日本経済は、昭和35年（1960年）の池田内閣所得倍増政策以降多少の凸凹はあったが、一貫して高い経済成長を遂げ、世界にも珍しい完全雇用社会に近づいていた。産業界は常に人出不足で、働く意志さえあれば就職先に困ることはなかった。大学新卒者も、就職に対しては楽観的な時代が続いた。

その間、技術革新、情報化、国際化、消費の高度化などによって、日本の産業構造も大きく変わり、有能な人材の引き抜き、転職が盛んになった。

それが、ここへきて様変わりしている。長引く不況が「大恐慌型」と呼ばれるまでに深刻化し、今年（1998年）春には、大学新卒者の就職率は、戦後最悪の65%程度にまで落ち込んだ（文部省調査）。

さらに来年春の新卒採用者は、自動車や電機などの基幹産業や大手コンピューター産業などの、これまで新卒者採用の牽引車だった企業が軒並み採用を手控えたため、前年実績を2.5%程度下回ると予想されている。

その一方で、新卒者の採用を秋にも行う「通年採用制」を導入する企業が目立ち始めている。卒業期の春、新卒者を一括採用しないで、景気の様子を見ながら秋にも補充しようというもので、約10%の企業が既に通年採用制に踏み切り、約30%の企業がその導入を検討中だといわれる。

こうした変化が、新卒者の就職にかなり大きな影響を与えそうである。

2. 就職活動の仕組み

毎年約70万人にのぼる大学新卒者（短大を含む）が、それぞれ自分に合った就職先を見つけるには、「どこの」「どんな会社が」「どういう人材を」「どの程度」採用しようとしているのか、という採用情報が必要である。

多くの学生が、卒業1年前の3年次の冬頃から就職の準備に取り掛かるが、その第一段階は、そういった会社の採用情報の収集である。彼らが会社の採用情報にアクセスする方法は、およそ以下ようになる。

- 1) 会社から大学宛に来た「求人票」が、大学の就職部（課）の掲示板に発表される。
- 2) その中から就職部が、適当と思われる会社を学生に推薦することもある。
- 3) 就職情報会社から企業の採用情報が個人宛に送られてくる。
- 4) 日頃から新聞の企業ニュースを読んで、就職したい会社の見当をつける。
- 5) 親や教師、先輩や友人などに望ましい会社を教えてもらう。
- 6) パソコンで、会社のインターネットのホームページにアクセスする。

このようなチャンネルを通して学生たちは、自分が就職しようとする会社を選別する。それが

決まると次に、目指す会社を訪問したり、就職のための資料を請求したりして、入社試験の内容や試験日を確認する。

会社の方も、そのような学生を相手にした会社説明会を準備し、会社の事業内容や採用方針を説明する。

その後、入社が内定するまでのプロセスは、資料5（就職活動タイムテーブル）のようになる。入社試験の内容は、職業適正検査、社会常識試験、論作文、面接などが多い。

中には、あまり苦労しないで目指す会社から内定をもらう学生もいるが、むしろそれは例外的に恵まれた一部の学生である。反対に、100社以上の会社に資料請求の葉書を出し、20社以上の会社説明会に顔を出すような学生も珍しくない。

3. 学生の就職（会社）観と会社の人材（学生）観

大学新卒者（99'年春）に最も人気のある会社は、資料4（就職志望会社ランキング）の通りである。これらの会社が選ばれた主な理由は、

- ① 技術力や企画力が優れている（技術・企画力）
- ② 将来性があり、今後の発展が期待出来る（将来性）
- ③ 若いうちから裁量権のある仕事を任せてくれる（裁量権）

などである、と言われている。社会性が高く、自分の才能を発揮できそうな新聞社、テレビ会社なども人気が高い。

逆に、会社が新卒者に求める人材像は、

- ① 自分で新しい課題を設定し、チャレンジする積極性を持っている人
- ② 創造的な仕事ができる個性的な人
- ③ 責任を持って仕事の結果が出せる人
- ④ 明るく、元気で、好感度の高い人

などで、ある程度の学力さえあれば、大学での成績などは問わない会社が多い。

最近の学生たちに見られるもう一つの傾向は、たとえ就職に失敗しても、自分が興味、関心を持たない会社には就職しようとししないことである。日本の私立大学を代表する早稲田大学には毎年8,000社を越す求人があるが、そのうち学生が関心を示す会社は1,200社程度で、残る6,000社近い会社には見向きもしない、という。

こうして卒業を延期（留年）したり、とりあえずアルバイトなどで食いつないだり、あるいは一時大学院に進学したりすることによってモラトリアム（決定猶予）期間を延ばしたりする学生が目立っている。

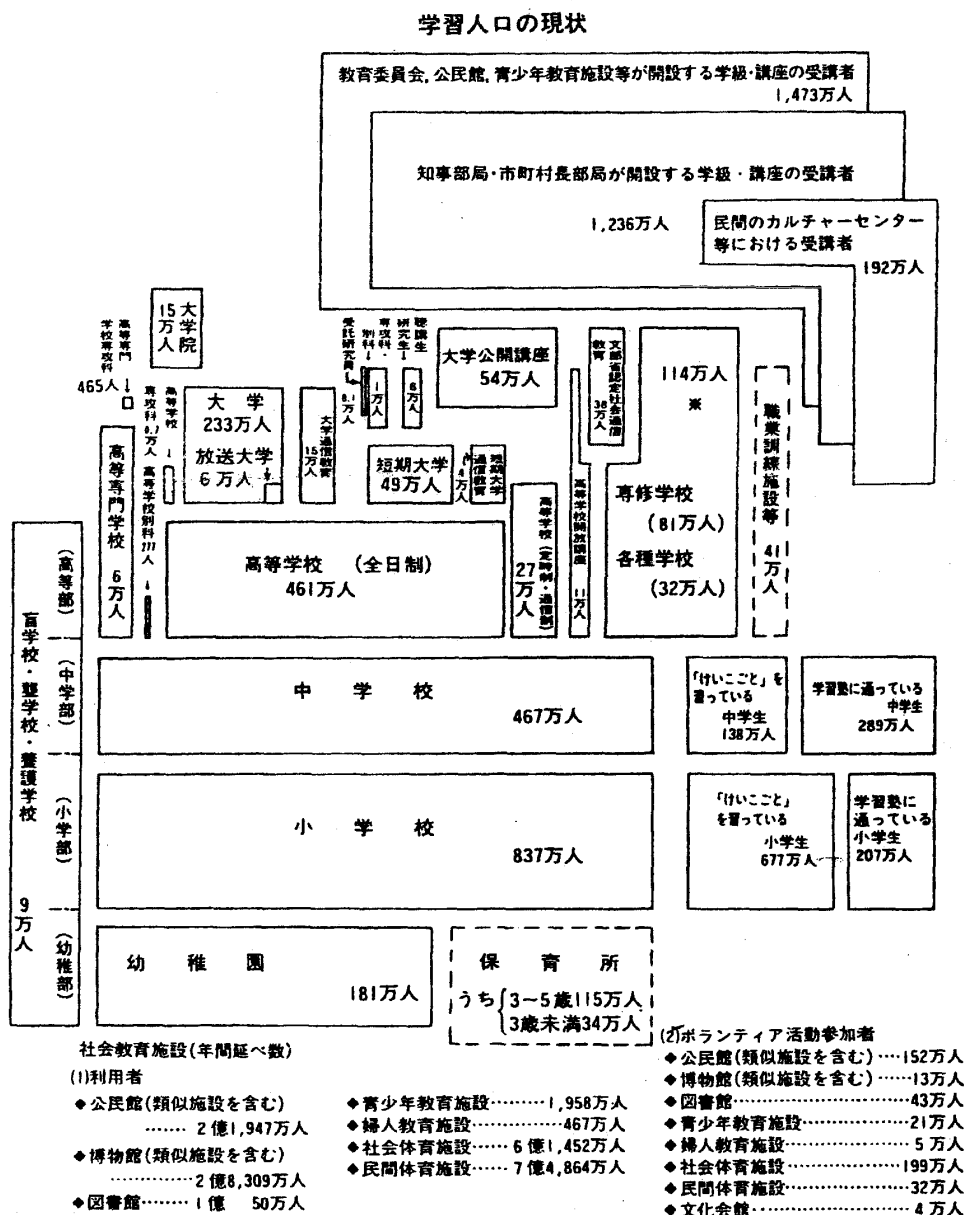
また、中国の北京大学などの学生の間では、米マイクロソフト社を創立し、アメリカン・ドリームを体現した、億万長者のビル・ゲイツの自伝的な著書『ザ・ロード・アヘッド（未来之

路)』がベストセラーになっているというが、日本の学生の中で起業家志向（ベンチャー・ビジネス志向）を持っているのは少数である。

アメリカの大学でも、優秀な学生ほど起業家志向が強いと言われる。それと比べて、日本の学生に「よらば大樹の蔭」とも言うべき安定志向が強いことの要因は、これまで長い間、企業に「年功序列終身雇用制」と呼ばれた人事システムが存続していたためと考えられる。

(註) 本稿は、1998年10月23日、中国河南省鄭州市・鄭州大学日本文化センターで同大学学生を対象に行った講演の要旨である。

資料1 日本の学校制度、大学・大学生数、進学率、就職率



(注) ※は四捨五入した数を使用しているため、内訳の数の合計とは異なっている。
 (資料) 文部省「平成7年度学校基本調査速報」、「平成5年度社会教育調査」、「平成5年度学習塾等に関する実態調査」等

資料 2 「日本の大学生の意識と生活」(株リクルート)

1997年4月、首都圏、関西の大学生1,000人調査の要点

1. 現在の状態

Q1) あなたは今、充実しているか

* とても充実している	16. 2%
* まあまあ充実している	54. 0
* そうでもない	19. 4
* 全く充実していない	6. 2
* 無回答	4. 2

Q2) 現在悩んでいることがあるか

* ある	63. 6
* ない	32. 3
* 無回答	4. 1

2. 大学進学目的と満足度

Q1) 何故大学に進学したのか

* 他の道は考えなかった	42. 6
* もっと勉強がしたかった	42. 0
* まだ社会に出たくない	38. 9
* 周りが行くから	21. 2
* 世間体から	18. 9
* 親の意向で	15. 2

Q2) 何を基準に学部・学科をえらんだか

* 学びたい学問だった	73. 6
* 高校時代の得意科目だから	23. 9
* 就職に有利だと思った	19. 7
* 自分の偏差値に合わせた	17. 6

Q3) 大学に満足しているか

* 大満足	8. 3
* 概ね満足	51. 3
* やや不満	29. 6
* 不満足	10. 0
* 無回答	0. 8

Q4) 在籍している大学は、入学したかった大学か

* そうだ	68. 8%
* 違う	30. 5
* 無回答	0. 7

3. 授業について

Q1) 何故、その授業を選択したか(4年生、複数回答)

* 内容に興味がある	83. 9
* 成績が甘く、楽に単位がとれる	53. 0
* 身につけておくべき知識だから	42. 3
* 先生が面白い	38. 7
* 出席をとらない	21. 0
* テストをしない	13. 5

Q2) 1週間の履修コマ(授業時間)数と平均出席率は?

* 履修コマ数	13. 4コマ
* 平均出席率	7. 7%

Q3) 大学の授業は社会で活用できると思うか

* 思う	64. 5%
* 思わない	32. 8

4. 学生生活について

Q1) アルバイトをしているか

* している	75. 2
* していない	24. 2

Q2) どんなアルバイトをしているか

* 店員	41. 2
* 家庭教師	23. 7
* 事務関係	10. 6
* 力仕事	0. 7

Q3) 1ヶ月の収入は?

* 3~6万円	40. 4%
* 6~9	28. 3
* 3万円未満	16. 4
* 9万円以上	14. 9

Q4) アルバイト収入の使い道は?(複数回答)

* 生活費や授業料の足し	36. 4%
* 旅行費用	34. 2

日本の大学生・その勉学と就職の状況

*趣味	32. 6	Q 4) 親のような社会人になりたいと思うか	
*おしゃれ	31. 1	* 思う	43. 4
*書籍代	23. 7	* 思わない	53. 2
*サークル(クラブ)活動費用	20. 9	* 無回答	3. 4
Q 5) サークル、クラブに加入しているか		6. 就職の準備と将来希望	
* 加入している	52. 8	Q 1) 現在、就職や将来のために準備している	
* 加入していない	35. 9	ことがあるか	
* 加入しているが活動していない	10. 2	* ある	67. 9
* 無回答	1. 1	* ない、無回答	32. 1
Q 6) どんなサークル、クラブに加入しているか		Q 2) 「ある」人は、どんな準備をしているか	
* 体育会系	21. 2	(複数回答)	
* スポーツ系	40. 9	* 職業資格の取得	58. 2
* 文化系	22. 0	* 就職に関連のあるアルバイト	27. 1
* 音楽系	10. 2	* 就職に関連する読書	21. 6
* 社会系	0. 8	* ビジネス雑誌の購読	13. 0
Q 7) どんなものを持っているか		Q 3) 今は「ない」が、これから将来役立つこ	
* パソコン	37. 8	とをやろうと思っているか	
* ワークプロ	35. 1	* そう思っている	77. 0
* ポケベル	32. 6	Q 4) 職業人としての能力をつけるために、大	
* 電話	30. 6	学在学中に他の学校へ通い、特別な勉強し	
* 携帯電話	18. 9	た経験があるか(いわゆるダブル・スクー	
* 自動車	13. 5	ル)	
* バイク	12. 5	* ある	20. 7
5. 大学生の自意識と親子関係		* ない	78. 8
Q 1) 自分を大人だと思うか		Q 5) どんな学校へ通ったか	
* 思う	19. 1	* 語学系	42. 0
* 思わない	79. 0	* ビジネス系	22. 2
* 無回答	1. 9	* コンピューター系	15. 0
Q 2) 早く社会に出たいか		Q 6) 卒業後の希望進路は?	
* 出たい	35. 7	* 民間企業就職	63. 1
* 出たくない	62. 6	* 公務員	15. 1
Q 3) 親との関係は、どうなっているか(複数回答)		* 大学院進学	12. 4
* 悩みごとを話すほうだ	41. 5%		
* 親に言えない秘密がある	72. 6		
* 親を尊敬している	75. 9		
* 親は煙たい存在である	24. 7		

資料3 千葉敬愛短期大学「学生による授業評価」モデル(1998年)

一般教科(基礎科目)は、小学校、幼稚園教員ならびに社会人としての基礎知識を身につけることを目的として、授業が設定されています。

そこで基礎科目について、学生諸君の授業に対する評価(アンケート形式)を頂き今後の授業改善に役立てたいと思います。下記の質問について回答してください。

授業科目名:	担当教員名:	第	学年	クラス
--------	--------	---	----	-----

授業は、講義・実技のどちらが主体でしたか。どちらかに○印を記入してください。講義 実技

評価は次の5段階です。該当する数字に○印を記入してください。

- | | | |
|-----------------|---------------|----------|
| 5. そう思う(+2) | 4. ややそう思う(+1) | 3. 普通(0) |
| 2. ややそう思わない(-1) | 1. そう思わない(-2) | |

I. 授業内容について

- | | | | | | |
|------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 1. 授業は授業計画(シラバス)どおりに行われましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 授業は期待していたとおりでしたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 授業は分かりやすかったですか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 授業で出された課題は多かったですか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 5. 授業内容はあなたにとって適量でしたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6. 社会人としての基礎知識あるいは基礎実技能力が身につきましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

II. 授業方法について

- | | | | | | |
|-------------------------------------|---|---|---|---|---|
| 7. 開始・終了時刻や出欠確認は公正に行われましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8. 授業は創意・工夫されていましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9. 先生の言葉は聞き取りやすかったですか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10. 授業は質問しやすい雰囲気でしたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11. 購入した教科書は活用されましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12. 補助教材(プリント、OHP、スライドなど)は活用されましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

III. あなた自身について

- | | | | | | |
|-------------------------------|-----------|---------|---------|---------|---------|
| 13. 履修する際に授業計画(シラバス)を活用しましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14. 欠席、遅刻をしないよう心掛けましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15. 授業中、他人に迷惑をかけないようにしましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16. 授業を集中して聞きましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17. 授業を集中して聞き、ノートをとりましたか。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18. 予習、復習をしましたか。 | 5. 週4時間以上 | 4. 週2時間 | 3. 週1時間 | 2. 週30分 | 1. 週0時間 |

IV. 自由記述欄(授業に関するご意見ご希望のある場合)

資料4. 学校教育人口と新卒者就職

学 校 数 (年次別)

(単位:校)

区 分	高等学校	高等専門学校	短期大学	大 学	専修学校	各種学校	(再掲) 高等教育	区 分
平成3年度	5,503	63	592	514	3,370	3,309	1,169	1991年度
4	5,501	62	591	523	3,409	3,202	1,176	92
5	5,501	62	595	534	3,431	3,055	1,191	93
6	5,497	62	593	552	3,437	2,934	1,207	94
7	5,501	62	596	565	3,476	2,822	1,223	95

在 学 者 数 (年次別)

(単位:人)

区 分	高等学校	高等専門学校	短期大学	大 学	専修学校	各種学校	(再掲) 高等教育	区 分
平成3年度	5,454,929	53,698	504,087	2,205,516	834,713	406,599	2,729,678	1991年度
4	5,218,497	54,786	524,538	2,293,269	861,903	389,807	2,838,520	92
5	5,010,472	55,453	530,294	2,389,648	859,173	366,536	2,941,310	93
6	4,862,725	55,938	520,638	2,481,805	837,102	339,063	3,024,258	94
7	4,724,947	56,234	498,518	2,546,646	813,342	322,129	3,067,096	95

進 学 率 (年次別)

(単位:%)

区 分	大学・短期大学等への現役進学率						大学(学部)・短期大学 (本科)への進学率 (浪人を含む)			大学(学部)への進学 率 (浪人を含む)			短期大学(本科)への 進学率 (浪人を含む)			区 分
	通称教育部への進学者を除く															
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	
平成3年度	31.7	24.6	38.7	31.6	24.5	38.6	37.7	36.3	39.2	25.5	34.5	16.1	12.2	1.8	23.1	1991年度
4	32.7	25.2	40.2	32.7	25.1	40.1	38.9	37.0	40.8	26.4	35.2	17.3	12.4	1.8	23.5	92
5	34.5	26.6	42.4	34.5	26.5	42.3	40.9	38.5	43.4	28.0	36.6	19.0	12.9	1.9	24.4	93
6	36.1	27.9	44.2	36.0	27.8	44.1	43.3	40.9	45.9	30.1	38.9	21.0	13.2	2.0	24.9	94
7	37.6	29.7	45.4	37.5	29.6	45.4	45.2	42.9	47.6	32.1	40.7	22.9	13.1	2.1	24.6	95

就 職 率

(単位:%)

区 分	短期 大 学			大 学			大 学 院						区 分
	計	男	女	計	男	女	修 士 課 程			博 士 課 程			
							計	男	女	計	男	女	
平成3年	87.0	73.0	88.0	81.3	81.1	81.8	72.7	76.7	50.3	66.3	68.7	49.7	1991年
4	85.7	70.6	86.8	79.9	79.7	80.4	71.2	75.3	49.1	66.6	69.0	51.4	92
5	79.8	66.3	80.8	76.2	76.5	75.6	69.4	74.1	46.1	66.1	68.6	50.1	93
6	70.1	61.7	70.7	70.5	71.8	67.6	68.3	73.1	45.9	65.7	67.6	54.5	94
7													95

資料5. 就職活動タイムテーブル

